

マーケティング

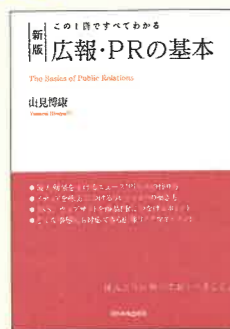


「あなたの知らない」
マーケティング大原則

足立 光、土合朋宏／著
朝日新聞出版
368ページ、2000円＋税

マーケティングのプロがP&Gや花王など国内外の新旧実例を交え、「あらゆる製品・サービスや業界にも通じる大原則」をまとめた一冊。消費者コミュニケーションの一要素として、「戦略的PR」の基本を解説した章も。特にマーケティングPRに携わる人におすすめ。

広報



この1冊ですべてわかる
新版 広報・PRの基本

山見博康／著
日本実業出版社
320ページ、2000円＋税

2009年に発売された同タイトルの新版。インフルエンサーマーケティングや動画活用といったデジタルPR、危機対応関連の項目に最新情報を加えた。巻末には記者クラブや主要メディアの連絡先も収録。企業のベテラン広報らによるアドバイスリストも参考になる。

メディア

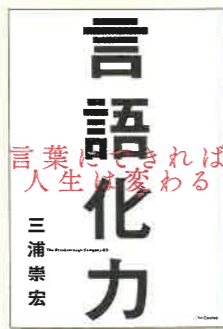


「反権力」は正義ですか
ラジオニュースの現場から

飯田浩司／著
新潮社
218ページ、760円＋税

ニッポン放送で看板番組を持つ、人気アナウンサーである著者。自らの取材経験や政治・外交・経済のあらゆる問題を通じて「メディアは反権力であるべし」という考えに異を唱える。被災者の描き方や基地問題などを例に挙げながら、既存のマスコミ報道を問い直す一冊。

コミュニケーション

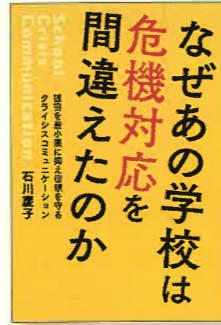


言語化力
言葉にできれば人生は変わる

三浦崇宏／著
SBクリエイティブ
288ページ、1500円＋税

博報堂出身、2017年に独立したクリエイティブディレクターによる著書。生い立ちや個人的な経験、手がけてきた企画などから「言語化する力」が仕事や人生のライフスタイルに必要であると訴える。言葉の因数分解や交渉術など、取り入れられそうなメソッドも多数。

危機管理



なぜあの学校は
危機対応を間違えたのか

石川慶子／著
教育開発研究所
160ページ、2000円＋税

危機管理・広報コンサルタントによる、小学校などでのクライシス発生時のコミュニケーションに特化した専門書。いじめによる自殺後の報道対応など、学校における危機管理トレーニング、緊急記者会見への備えなどを分かりやすくポイントを絞って解説している。

実用



病まないための
細胞呼吸レッスン

根来秀行／著
集英社
192ページ、1300円＋税

ハーバード大、ソルボンヌ大の客員教授である著者が、酸素と栄養素からエネルギーを生み出す「細胞呼吸」の重要性を説いた一冊。呼吸法や睡眠、食生活習慣の見直しから「忙しくて疲れやすい」「よく眠れない」といった悩みを解決するヒントを提供する。

世の中には「発想」にまつわる本はたくさんある。ところが「妄想」となると、それほど多くはない。

本書の著者、浅生鴨氏によれば妄想の広げ方にはコツがあり、妄想を形にしたりアレンジしたりする方法もある。「日々の妄想こそが、アイデアの種になる」という著者なりの思考プロセスを解明するのが、この本の狙いだ。

「普段、企画を考える仕事をしている人はこんな風に毎日過ごしているんだ」というヒントになれば、新しく企画担当になった人や新しい施策を急に考えなければいけなくなった人のための入門書のひとつとして、参考にしてもらえたらと思います。

著者はNHK出身で、かつて広報局で公式Twitterアカウントの運営を担当していた。NHKの固いイメージを覆すような「ゆるい」投稿が話題となり、企業アカウントの中の人々の先駆けとしても知られている。

2014年にはNHKを退職し、現在は作家やクリエイターとして活躍。個人アカウントには約4万人のフォロワーがいる。

INTERVIEW

「ググらない」という発想法
妄想がアイデアの種になる

『面白い!を生み出す妄想術 だから僕は、ググらない。』



浅生 鴨氏

あそう・かも 1971年兵庫県神戸市生まれ。大学卒業後、IT、イベント、広告、デザイン、放送など様々な業種を経験。その後NHKに入社。NHK在籍時に同放送局の広報局Twitterを担当していた「NHK_PR1号」として知られる。2014年7月末にNHKを退職後、小説、エッセイなどの執筆活動を中心に活躍。

辞書は妄想の必須アイテム

題名にもある「僕は、ググらない」も、発想法のひとつだ。「検索をしないわけではありませんが、あくまで検索で見つかる情報はとても限定的なもの。全部すでに世の中にある情報でもあります。最初の段階では自分の頭で考え、一見無関係なことまで発想を飛ばし、それをつなげる過程で新しいアイデアは生まれると思っています」。

そこで手応えのあったアイデアを形にしていく際に用いるのが「辞書」。意味や由来はもちろん、類語や対義語、用例などからさらに妄想を膨らませ、アイデアを固めていく。

実際に都内にある著者の仕事場を訪れると、多数の辞書が取り揃えてあった。国語辞典やことわざ辞典、はたまた方言の辞典まで種類も様々。辞書は幼少期から妄想のために重宝してきたアイテムだ。

「僕らが使っている言葉は世界で見るとほんの一部。辞書はその狭い世界を広げてくれる。言葉や表現、アイデアに広がりを与えてくれ、何度見ても発



面白い!を生み出す妄想術
だから僕は、ググらない。

浅生 鴨／著
大和出版
224ページ、1400円＋税

見があります」。

アイデアは一から考えない

与えられた課題に対しての解決策やアイデアを一から考えるのではなく、日ごろ積み重ねた妄想を必要なきに取り出し、それを磨き上げる。そのようなプロセスを経てアイデアにしてい、というのが著者流の発想法だ。

日常のあらゆる場面において妄想力を鍛えることは可能だ。例えば街を歩いていて、自動車をぼんやり眺めていたら人間の顔に見えてきたとする。ヘッドライトを目と捉え、擬人化させて、そこから車同士の物語に発展させていく。「ある種、子どもの“ごっこ遊び”のようなものに近いですね(笑)。日ごろからそんな風に街を見てみると、新たな発見がたくさんあります」。

当然ながら、妄想は妄想に留まっていたら意味がない。文中では、アウトプットの習慣の重要性にも触れている。「頭の中でぼんやりと思っているだけでは妄想も深まらないし、アイデアを具現化することもできない。単語1語でも、1本の線からでもいいので自分の頭の中にあるものを文字や形にしてアウトプットすることを習慣づけられるといいと思います」。